

第3篇 先土器時代遺跡の構造について

— 特に木苅峠遺跡を中心として —

古 内 茂

1 序

現在の先土器時代の研究は各遺跡で発見された個別的な石器群の比較研究と同時に、石器が集中的に出土する範囲（ユニット）を把握して、1遺跡内での先土器時代人の行動を具体的な形に復原しようとする研究が意欲的になされるようになった。これは従来の調査方法よりもさらに精密さの要求される調査でもあり、しかも遺跡全体の発掘調査を通して初めて意味を持つものになろう。また、このような調査方法の進展に導いた、東京都野川遺跡、神奈川県月見野遺跡の調査はそれなりの意義をもつものと言える。

以上のような状況の中において、千葉県下での先土器時代遺跡の調査もここ数年間に20カ所を越える程となった。この中には前記の2遺跡同様大規模な遺跡の調査や立川ローム層下部より発見されたより古い石器群などもあった。いずれも緊急調査というかなり制約された中での調査であり必ずしも充分満足できる調査とは言えないまでも、これらの調査により県下における先土器時代の文化内容の一端が明らかにされたこともまた事実である。さらに、現在要求されている研究に対し、今後いかなる方向で対処すべきかが残された重要な課題ともなっているのが現状であろう。

さて、調査のなされた遺跡は県下でも下総台地を中心とした地域であり、比較的良好な層序を示す一帯でもある。むろん武蔵野台地や相模野台地と対比してみると、層序についての大きな差異は認められよう。石器群の包含されている立川ローム層の薄いことも特色の一つと言える。このような条件下においても遺跡内で複数の文化層が次第に認められてきている。中でも、最も多く石器群が発見される層位はハードローム上面よりソフトロームに至るまでの間であり、小田静夫・C.Tキーリー氏の言うPhase IIb~IIIの時期に大半を含めることができるものと思われる。そこで、ここでは資料の豊富に出土している遺跡を中心にして、下総台地での遺跡あるいは石器群のあり方を個々のユニットを通して考え、またユニットの同時存在についても触れてみたい。

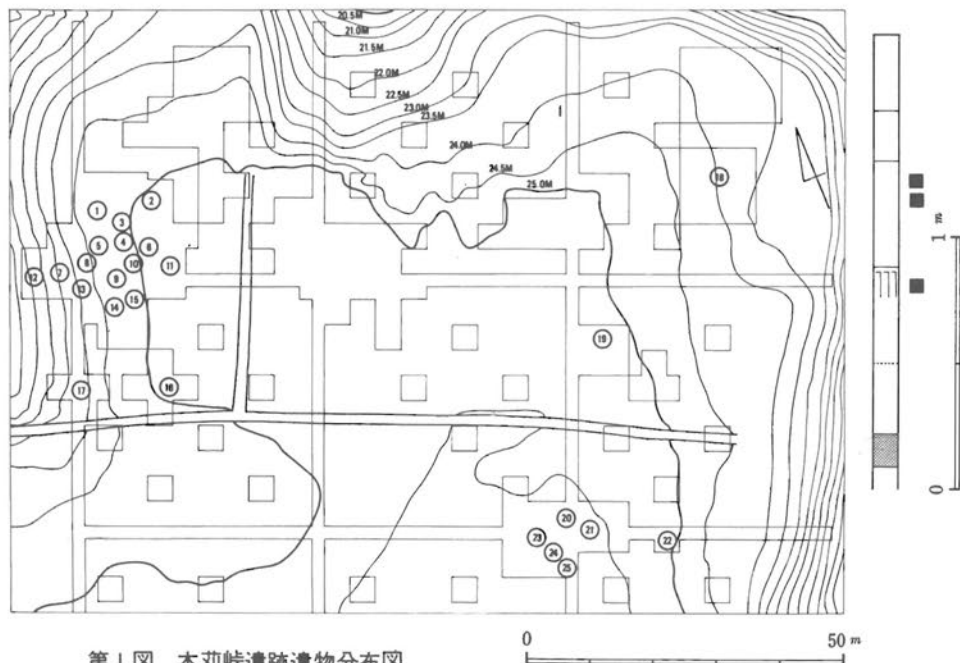
2 遺跡の概要

最近、調査あるいは報告のなされている遺跡は多数あるが、調査例の多くは小範囲の調査か、限定された中での調査であり必ずしも1遺跡の全容を知ることができるとは思えない。しかし、その中にあって2、3の遺跡ではその様相をある程度までは把握できるようなものもある。つまり、何カ所にもわたって検出された石器群を出土する遺跡がそれにあたる。完全ではないに

しろ、下総台地での石器群のあり方を示す一つのメルクマールともなり得るものと考えられる。遺跡の規模では最大のものとして木苺峠遺跡をあげることができよう。この他にも地国穴台遺跡、向原遺跡、石道谷津遺跡、高根北遺跡などで何地点かにわたる石器群が検出されている。そこで、ここでは下総台地において調査された代表的な遺跡を中心にして、その概要に触れつつユニットの構成を見てみたい。^{註2}

木苺峠遺跡（第1図） 調査は昭和47年9月より48年3月に至るまで続けられ、調査面積は20,000㎡を越える広大なものとなり、これは遺跡の位置する小台地をほぼ全面にわたっての調査となった。台地全域の調査ということでも本遺跡の調査は高く評価されよう。遺跡の標高は25m前後となり台地の中央部でも27mを若干越える程度である。発掘の結果、先土器時代に属する石器群は25個以上のユニットによって構成されていた。これは、下総台地において最大規模を有することは言うまでもない。出土地点については台地の中央部よりもむしろ谷津頭に沿って検出される傾向にある。発見された石器群は報告で詳しく述べられているが、ここでも一応の概略を記しておきたい。25個以上のユニットは出土層位に明確な差をもって発見されており、石材の使用頻度などから時期的には3期以上に分離できるようである。これは時期区分としても妥当と言えよう。むしろここでは、石器群の変遷よりも一つの大きな文化期の把握ということで、報告によるⅠ～Ⅲとの時期区分に従い石器群を略述する。

木苺峠Ⅰ石器文化に属するユニットは6個ないし7個が検出されている。①、③、⑦、⑫と

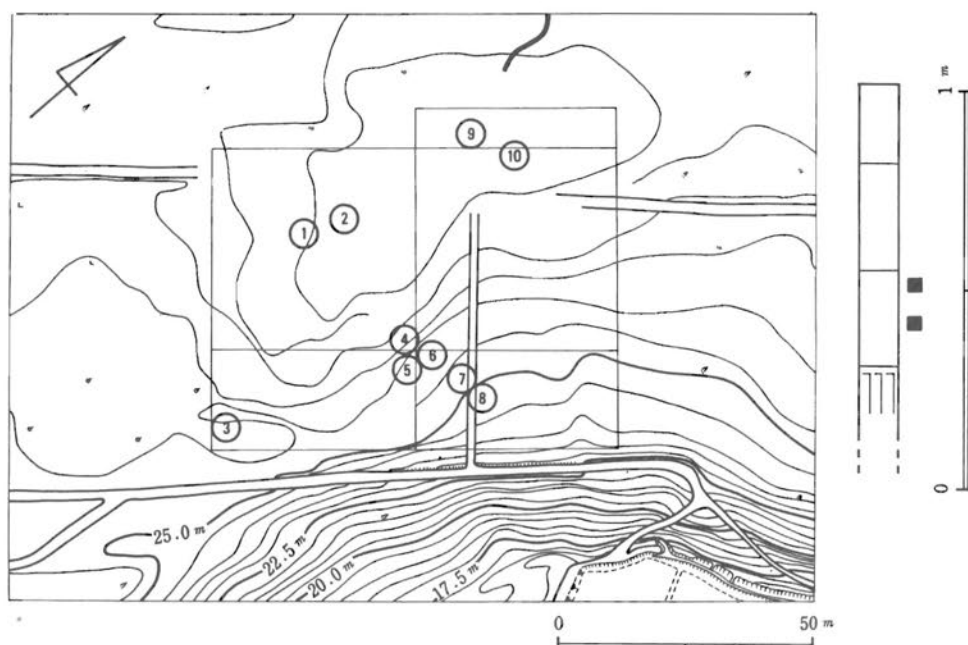


②、④、⑤の各ユニットが各々接近して位置する。出土層位は第4層（ハードローム）の上部と言える。石器組成はナイフ形石器、尖頭器、スクレイパー、彫器、錐器、不定形石器などで構成されている。他に刃器状剥片の出土が著しい。ナイフ形石器は計12点が検出され、尖頭器は1点と少ない。このため、主要な生産具ではナイフ形石器が優位を占めていたものと思われる。また、製作過程における基部、先端部での切断は普遍的に施されていたものであろう。使用される石材では①、③、⑦、⑫では珪質粘板岩が多く、⑭、⑲、⑳の各ユニットでは黒曜石によって占められている。ナイフ形石器では黒曜石を用いたものは小形化する傾向にある。むしろすべてのユニットは同時成立したものではなく時間差を認めてよいであろう。

木苺峠Ⅱ石器文化は11個以上のユニットが確認されている。この時期の石器群は②、⑬、⑳の各ユニットより出土した石器で代表される。出土層位は第3層（ソフトローム）となるが、第2ユニットの場合、3層下部に包含層があったらしく、かなりの時間差が認められる。石器組成はナイフ形石器、トラピーズ、尖頭器、スクレイパー、不定形石器と比較的豊富である。他に礫群を伴う。ここで中心をなす器種は尖頭器であり、これには片面加工品と両面加工品とが存在する。また、薄い剥片を利用し、周辺を簡単に加工して尖頭器としているものもあり、いくつかのタイプに分類することもできる。石材にはチャート、安山岩、珪質粘板岩などが多く、黒曜石は概して少ない。これは向原Ⅰや地国穴台Ⅱでの傾向と一致する。剥片剥離技術はⅠ期の場合と異なり、刃器状剥片の剥離は特に意識されていないようである。すでにこの頃から刃器状剥片に固執しない剥片剥離が行われてくるものと思われる。

木苺峠Ⅲ石器文化に含められるユニットは7個が確認されている。ここでの石器群は第10ユニットによって代表されよう。これは一部にいわゆる細石器文化としての色彩を帯びるものであり、出土層位は第3層上部とすることができる。石器組成はナイフ形石器、尖頭器、スクレイパー、彫器などによって構成され、彫器では尖頭器状石器にファシットを加えた、いわゆる木苺形彫器が特徴的と言える。尖頭器はやはり片面加工と両面加工の二者が存在する。使用される石材では黒曜石、珪質粘板岩、安山岩などがあり、中でも黒曜石が圧倒的に多い。石材の選択という点からも細石器文化の一端が窺えるが、石器組成から見れば向原Ⅱとは大きな違いをもつ。

向原遺跡（第2図） 調査は昭和46年に行われ、遺跡は谷津頭の西に沿って位置する。標高は26～7 mで台地中央の平坦部でも28 mを越えることはない。調査面積は約 5,000 m²で、遺物の分布は6地点に分割されて報告されている。この中には先土器時代に属する石器群を出土している地点も含まれており、いわゆるユニットを形成しているものは10個となる。出土層位は第3層（ソフトローム）が中心で、第2層（暗褐色土）でも若干検出されている。第4層（ハードローム）では皆無となるため、石器群の包含層は一応第3層中にあると見てよい。だが、各石器群は報告でも触れているように第3層最上部出土の石器群と第3層中部出土の石器群と



第2図 向原遺跡遺物分布図

に層位的にも明確に区別できる。しかも、石器組成、使用される石材等にも差が認められ、前者の石器組成の主体をなすものは細石核と細石刃であり、後者のそれはナイフ形石器、尖頭器となる。そこで、前者を向原II、後者を向原Iと分離して考えることが妥当なようである。

向原I石器文化に属するユニットは一応、③、⑦、⑨の各ユニットが考えられる。出土層位は若干の差をもつにしても第3層中部としてよいであろう。出土石器にはナイフ形石器、尖頭器、不定形石器などがある。ナイフ形石器は6点検出されているが、このうち5点は切出形に近い形態をもつのが特徴的である。石材はチャートと安山岩が利用されている。尖頭器は4点が検出され、大形の粗雑な両面加工品を含む。うち1点は錐器とも考えられる。欠損品を含む2点は両面加工品でありナイフ形石器との共存を証明するものである。他に不定形石器、剥片、礫群などが知られているが、石材は主にチャートで、安山岩、頁岩、砂岩等も使用されており、黒曜石の少ないことが注意される。以上の如く、向原Iでは礫群を含む3ユニットの発見があったが、定形石器としての主体を占めるものはナイフ形石器と尖頭器でスクレイパー類のような加工品の少ないことに注意したい。

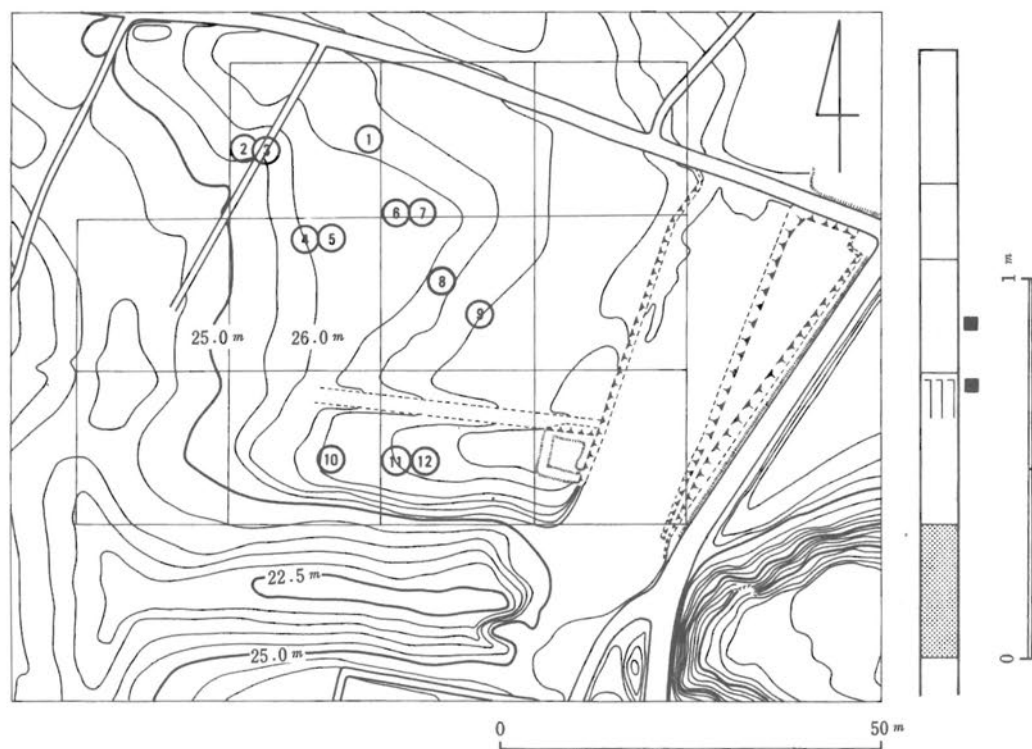
向原II石器文化はいわゆる細石器の段階であり、これに属するユニットは多く前記のユニットを除くすべてで構成されている。第6ユニットでは細石核、細石刃と思われる石器は出土していない。だが出土層位が示すように第2層から第3層上部であるとすれば、向原Iの段階よりも新しい時期のものとなろう。石材でも安山岩が多用され、向原Iでのチャートと若干の差異をもつ。このため、第6ユニットは向原Iの段階よりもむしろ向原IIの段階に近いものと考

えられる。出土石器には細石核、細石刃をはじめ尖頭器、スクレイパー、使用痕のある剥片などがみられる。尖頭器以下は量的に少ない。出土状況からすれば尖頭器、スクレイパーは細石器と共伴しているようであるが類例も少なく向原IIでの石器組成と見做す積極的な根拠もないように思われる。石材は黒曜石の使用が顕著であり、若干ながらチャート、安山岩、流紋岩等がある。出土した細石核15点のうち黒曜石が12点あり、第1ユニットでの細石刃にはすべて黒曜石が使用されている。この段階での黒曜石の撰択は船尾白幡遺跡、三里塚No.52遺跡でも見られるように共通な意識が働いていたらしい。その他に注意すべき点として、細石刃のような小剥片と混在して比較的大形の剥片も存在しているようである。これらの中には調整痕を有し、石器として利用されていたものと思われる剥片もあることから、石器の組成を考える上でも重要な要素をもつことになろう。大形剥片を剥離した石核は出土していないため、剥離技術については不明瞭な点を残すが剥片から推察すれば特定の技法の存在はなく、目的とする剥片もなかったものと思われる。

地国穴台遺跡（第3図） 調査は昭和46年から47年にかけて行われている。遺跡は谷津頭の奥に位置し、標高は26m内外を示す。調査面積は約12,000㎡で先土器時代に属する石器群の分布は12地点にわたって確認されている。他に縄文時代草創期の隆起線文系土器群の出土が見られた。石器の出土層位は、第3層（ソフトローム）が多く、計10個のユニットが発見されている。他に第4層（ハードローム）からも2個のユニットが発見されており、この第4層出土の石器群と第3層出土の石器群は明確に新旧関係が認識できるし、石材においても差異を指摘できる。これら2枚の文化層での石器組成はナイフ形石器、尖頭器、スクレイパーなど基本的にはそれほど差は認められない。また第3層中からは礫群も多く見られる。この他、細石核と考えられるものも出土しているが、細石刃の出土はなく明確なユニットの形成はなかったものと思われる。そこで第4層の石器群をI、第3層のそれをIIと区別することが可能となろう。

地国穴台I石器文化は接近した2個のユニットから構成されている。第4層上部より出土し、石器組成はナイフ形石器、スクレイパー、ハンマーストーンによって構成される。定形石器は10点と少ないが、その内7点はスクレイパーによって占められている。他に石核と多量の剥片が出土しているため、石器製作としてはスクレイパーの製作に重点がおかれていたことであろう。剥片は小形のものが多く、大形剥片は石器として利用されたものもある。石材には黒曜石を多用し、頁岩、砂岩、チャート、粘板岩、凝灰岩なども若干存在するが、総数216点のうち90%以上を黒曜石が占める。

地国穴台II石器文化は10個以上のユニットで構成される。石器組成にはナイフ形石器、尖頭器、スクレイパー、礫器などが見られる。ナイフ形石器は切出形に近い形態を備えたものが多く、他に側面を簡単に加工したものを1点だけ含む。尖頭器は両面加工品であり、第11ユニットから2点出土している。石材には粘板岩、頁岩、チャート、砂岩、メノウなどが多く使用さ



第3図 地国穴台遺跡遺物分布図

れ、黒曜石の使用頻度が地国穴台Ⅰの段階に較べて極端に少ないことが注目される。

向原北遺跡 調査は昭和49年に行われたものであり、前記の向原遺跡と同一台地上に存在する。地国穴台遺跡とも接近しており石器群の内容も両遺跡と強い関連を示すものであった。石器の出土地点は1カ所であり、第3層(ソフトローム)から出土。ナイフ形石器、スクレイパー、礫器が各1点ずつ出土し、ナイフ形石器は切出形に近い。また、ここでは剥片と石核との接合例が多く確認されたのではあるが、剥離技術には特に注目すべきものではなく、目的とする剥片を意識した様子は窺えない。石材はメノウ、安山岩の2種類が多く、他にチャート、砂岩などが少量含まれていた。メノウの顕著な出土例は向原、地国穴台遺跡にはない。ただ木苧峠遺跡第17ユニットに類例が求められる。その他、今島田遺跡でも多い。反面、黒曜石の出土はない。

以上、代表的な4遺跡について、その概要を記してきたが、これらの遺跡での石器群は時期的には大きく3期に分割することができよう。つまり、以下の如くならう。

- 1) 第4層(ハードローム)上部より出土する石器群で比較的黒曜石を多用する。
- 2) 第3層(ソフトローム)を中心として出土する石器群で細石器を伴わない。石材としてはチャート、頁岩、安山岩などが使用される。また、礫群がしばしば発見される。

3) 第3層最上部に包含され、細石器を伴うもので、使用される石材は黒曜石が一般的である。礫群はほとんど見られない。

下総台地では1)の時期よりも古い石器群^{註3}や3)の時期よりも新しい所産と考えられる尖頭器を主体とした石器群^{註4}なども発見されているが、編年を目的としたものではないため、ここではとりたてて触れることはしない。

1)の時期に含められる石器群を出土する遺跡では、木苺峠I、地国穴台I、高根北I^{註5}としたものをはじめとして、法蓮寺山遺跡、鴻ノ巣遺跡、雨古瀬遺跡等で出土している石器群もこの中に入るであろう。これは、武蔵野台地での編年の位置づけからすればPhase II bに對比されるものと考えられる。これらの遺跡の中でも最大の規模をもつ木苺峠I石器文化は計6個のユニットが発見され、3個づつが互いに接近して検出されている。報告によれば、これをユニット群として把らえ、「それぞれが独立した存在ではなく有機的な関連性をもっている」(鈴木1975)としている。これは各ユニットの接合関係からも容易に推定できるし、重要な発見であったことは報告からも窺える。

ここで、木苺峠遺跡の個別的なユニットを見ると、第1、24とにおけるナイフ形石器の出土に注意したい。第1ユニットでは素材となる刃器状剥片と成品との間に石材による差も認められ、他のユニットからの運搬も考えられるが、第24ユニットでは石核の存在からもナイフ形石器の製作が充分考えられよう。これは日常生活におけるナイフ形石器との密接な係わりを示すものであろうし、生産用具としてのナイフ形石器の必要性が強いものであったらうと考えられる。高根北Iの場合もこれと共通する性格を有していたものであろうか。また反面、地国穴台Iの第6、7ユニットでは二次的な生産用具としてのスクレイパー類が優越する。ナイフ形石器は反対に少ない。ユニット数の少なさにもよるであろうが加工具としてのスクレイパー類は地国穴台I石器文化での人間生活の側面を反映させるものであろう。

2)の時期は下総台地内でもっとも普遍的に発見される石器群であり、遺跡も多く資料も豊富なものとなっている。木苺峠II、地国穴台II、向原Iによって代表されようが、他に武西北ノ台遺跡、丸山遺跡、殿台遺跡、今島田遺跡、鴻ノ巣遺跡の一部、石道谷津遺跡等々がある。これらの一連の石器群は武蔵野台地でのPhase II b~IIIの間に位置するものと思われる。この時期の石器群の様相として、ナイフ形石器(切出形に近い)を有する一群の石器群と、尖頭器を有する一群の石器群との並存がある。前者は木苺峠第2ユニット、地国穴台、向原、丸山、石道谷津遺跡などで認められる。後者は木苺峠IIの大部分と殿台遺跡、鴻ノ巣遺跡などがある。時期的には前者のほうが古い場合もあるが明確な根拠を欠く。他にいわゆる礫群^{註6}の出土が目立つ。向原遺跡第3ユニットでは石器類の出土はなく礫だけによって構成されるものもあり、本地域における礫群の盛行はこの時期にあったものであろうか。いずれにしてもユニット数の多い遺跡は、必ずと言ってよい程礫群を主体としたユニットが存在する。礫の表面は火熱によるものであろうか、赤褐色を呈することが多い。ただ、礫群に使用されるところの自然石の大きさはこ

ぶし大か、それ以下のものが多く、配石と呼べる程の規模を有することは少ないようである。礫群の規模に差があるにせよ武蔵野台地や相模野台地での礫群と同じ性格をもつものであろう。おそらくこれは地理的条件下における採集の困難さに起因するものと考えてよいであろう。

また、遺跡から礫が出土する場合、破碎された状態で一個体の礫が何点かに分散して検出されることがしばしば見られる。礫の接合作業は石器類のそれと較べれば容易であるし、礫の接合関係もまた石器同様重要なものとみることができ。木苧峠遺跡の場合、礫によるユニット間の関連が把握された(第4図)。第8ユニットを中心にして礫片の接合が5個のユニットにわたることが確認された。これは時間的にも密接な結びつきを有するものと考えてよいであろう。過去に調査された遺跡では、礫のユニット間における接合について明確におさえられた例はなく、他と比較はできないまでもユニット間の結びつきを考えるうえでは興味深い問題となろう。

3)の時期は細石器文化期のものであり、代表的な遺跡として、向原II、三里塚No.52遺跡、船尾白幡遺跡などが知られている。だが、総合的に資料は少なく、とりたてて問題とすることもなかろうが、ただ木苧峠IIIとしたものの中にも細石器と思われるものが存在する。ここでは、いわゆる木苧形彫器との伴出関係に注意しなければなるまい。他には三里塚No.52遺跡でもこのタイプの彫器との関係が知られている。また、同様な彫器は高根北IIでも発見されているが、ここでは細石器は存在しない。しかも、この種の特殊な彫器は他の地域でも多数の遺跡において確認されている。北方系文化との関連も指摘されてはいるが、どのような形で細石器文化と係ってくるのか今後の調査例を待たねばなるまい。^{註7}

ところで、これまで紙数を費やした遺跡と石器群の概略はさておき、遺跡での石器の出土を見ると、石器の器種と器種間での出土量とに明確な差のあることはどの遺跡でも見られる。いわゆるユニットの形成については下総台地なりに幾つか類別できようが、ここで最も注意しておくべき点として、特定石器の優越するユニットがある。後述するが幸いなことに木苧峠遺跡では基本的に3個内外のユニットごとにグルーピングできるようである。この特定石器を多く出土するユニットは、そのグループの中で比較すると、出土総数で2倍か、それ以上の規模を有する場合が多い。これは明らかに各グループ内において構成されるユニットの中心的存在であり、遺物として残された石器群とそれを使用した人間集団の性格を考える場合に重要な位置を占めることは言うまでもなかろう。また、換言すれば、主要ユニットとそれに付随する小規模なユニットで一時期の先土器時代人の行動が集約されているものと思われる。この点をふまえて、次のユニット間の問題について論を進めてみたい。^{註8}

3 ユニットの分布と変遷

先土器時代の遺跡で発見される石器群は出土量によってもまちまちではあるが、一定の分布

範囲のあることは月見野遺跡、野川遺跡の例を引き出すまでもなくすでに認識されているところである。そして、この分布範囲をユニット、ブロックなどと仮称することは、より遺物の出土状態を重要視し、人間集団の行動の結果としての一側面を把握するとの認識のうえにたったものと言えよう。また、それよりもやや広い意味で石器群を理解するのにコンポーネント^{註9}という言葉も使用されている。このような現状を見ればアメリカで成立したセトルメント・アーケオロジー^{註10}の日本における先土器時代研究に与えた影響はきわめて大きなものと言える。

ところで、このユニットを形成する遺跡は以前から注意にのぼっていたようであるが、具体的な分析が試みられたのは野川遺跡で、ここでは小林達雄、小田静夫の両氏によってユニットはA型～F型までに分類された。(小林達雄・小田静夫1971)以下、次の如く定義されている。

A型 石器の種類が豊富。通常遺物量も多くいろいろな行動型が集約的に行われたか、長期間に亘る継続を示唆する場。

B型 石器の種類が単純。限られた特定の行動とのみ関連するか、短期間の継続を示唆する場。

C型 定形的な石器がなく、Core、Flakeが卓越する。石器製造地で、製品がもち去られた場。

D型 Grinding stone. Pounding stone. Anvilなど、とくに厨房具と考えられる石器も保有する。炉の近くに接するものがある。

E型 石器の種類が単純で、Flake、Coreなどが大量にある。Flake同志あるいはCoreにFlakeが附着する例がある。特定の器種の製作の場。

F型 石器やFlakeなど、遺物が数点以下あるいは単独にある。特定の行動に関連するか、または特定の行動と直接の係り合いをもたず、ある行動の過程で偶然脱落したもの。

このような所見に対し、各研究者からの批判も加えられているが、今後の研究方向を示唆した論文として高く評価されよう。その後、武蔵野公園遺跡の報告で小田静夫・C. T. キーリーの両氏は野川流域のセトルメントパターンを分析、整理し、「各遺跡ごとに遺跡の型式(Component type)が作れるようである」(小田・キーリー1975)と述べている。この遺跡の型式は3つに分類できるようである。

Type1 大きなユニットが3つ以上存在し、そこにはいろいろな行動のほぼ全部が展開されている。時間的には比較的長期間居住し、25～60人前後のバンド(band)からなり、Base Camp的性格をもつ遺跡。

Type2 小ユニットが1～2カ所でそこにはある行動の幾つかが行なわれ、数日から1週間位の短期間の居住がある。1ないし2つの家族的集団による採集、狩猟活動が行なわれた場所。Season Camp、Work Campと呼ばれているものがこれに入る。

Type3 ユニットF型で代表され、個人の行動が反映しているもの。たとえば動物を殺した場所、遺物を落していったような場所がこれにあたる。Transit Campと呼ばれるもの、ある

種のWork Campもこのなかに入る。

とのかなり具体的な提示があった。これら3つの「遺跡の型式」の設定は下総台地の例にあてはめてみても、これを大きく逸脱することはないように思われる。

また、本地域における遺跡内でのユニットを個別に見ると、やはり種々のタイプが存在し、若干の差こそあれ基本的には野川遺跡などと共通した面を備えているものと理解してさしつかえなからう。ただ仙川遺跡のように豊富な器種と製品の出土量に関しては相異が認められるようでもある。したがって、ここではユニットとしての認識を導いた野川遺跡での分類を一応の参考としつつ、各遺跡でのユニットの分布と変遷とについて考えてみたい。そして、これにより先土器時代における遺跡の構造の一端を垣間見ることができれば、ここでの目的を果たすことになろう。

そこで、まず下総台地で調査のなされた著名な遺跡でのユニットを比較、検討して分類すると以下の如くA～Eの5個のタイプに分けることが可能となる。

タイプA 石器の器種は少ないが、他と較べて出土量が多い。もちろんここでは石器製作がなされていたものと思われるし、ユニットの規模が大きく、特定石器の卓越で特徴づけられる。野川遺跡でのユニットA型に類似。

タイプB 石器の量は割合少ないが一応の器種をそろえている。ユニットの規模も比較的大きいものとなる。野川遺跡でのユニットB型に類似。

タイプC 石器は1～2点で剥片が大半を占める。出土総数は50～60点で100点を越えるものは少ない。剥片剥離作業が主になされていたものかも知れない。野川遺跡でのC、E型に類似。

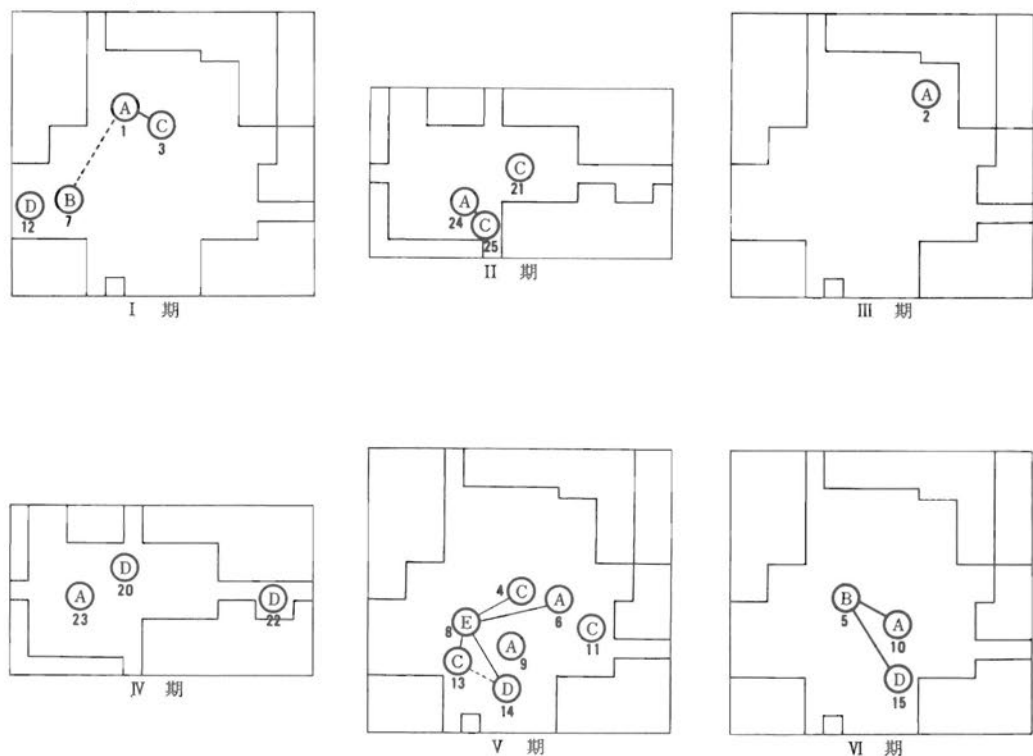
タイプD 石器はほとんど存在せず、剥片が10～20点、あるいはそれ以下の出土量を示すにすぎず、接合関係が認められない時には帰属時期の判定にも困難さを伴う。

タイプE いわゆる礫群として扱えられるものであるが、剥片やまれに石器の出土も見られる。野川遺跡でのユニットD型に類似。

この他に礫が少量混在する場合や、剥片が離れて1～2点出土することもあるが、発掘区と未発掘との関係で細部にわたり遺物の出土を記録することは不可能に近いため欠落することもある。いずれにしても、純粋な礫群を除けば、A～Eの各ユニットとも何らかのかたちで石器製作に従事していたものと思われる。

それでは下総台地における先土器時代遺跡の一時期におけるユニット群はどのような形で構成されていたものであろうか。この疑問に答えてくれる遺跡として木苧峠遺跡をあげることができる。ここでは前述した如く、ユニット相互間の関連が遺物の接合という具体的な形で捉えられた。これはユニットの成立が同時期か、あるいはそれに近い時期のものであろうとの推測も可能となり、関連ユニットを個別に分析すれば当時の人間集団のあり方を解明することにつながるものとも考えられる。そこで、木苧峠遺跡での各ユニットを接合関係で抽出すると少

なくとも6期にわたる居住の痕跡を認めることができる。(第4図)
註12



第4図 木苅峠遺跡関連ユニット分布図

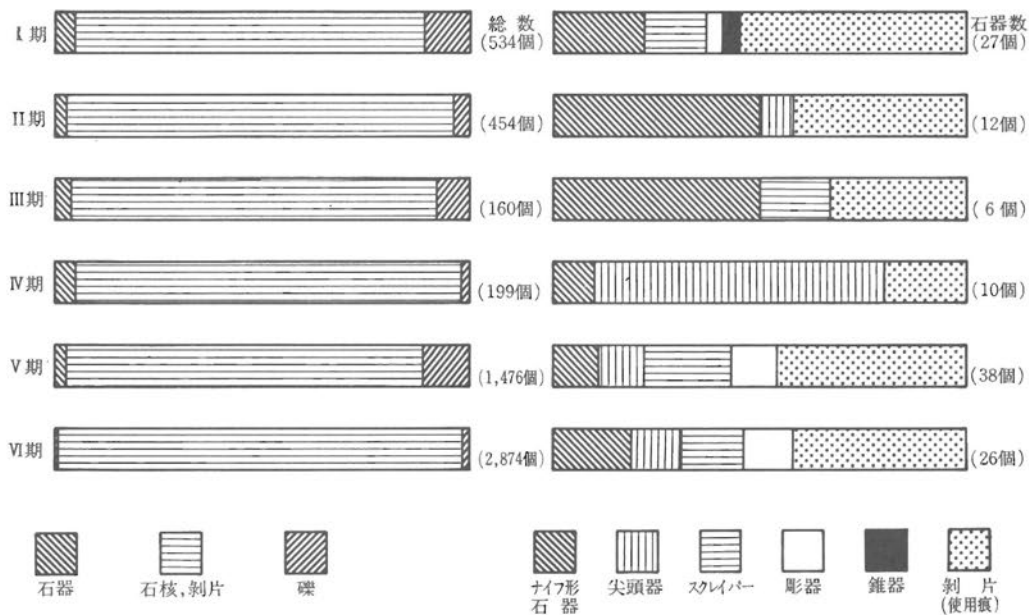


表1 木苅峠遺跡出土石器表 (I~VI期)

木苧峠第Ⅰ期 ユニット数は4個で構成される。報告によると、第12ユニットについては第7ユニットの流出とも考えられるという。ユニット間の接合は①と③だけであるが、①と⑦において同一母岩から剥離されたと思われる剥片が確認されている。ここでのユニットを分類すれば、①-Aタイプ、③-Cタイプ、⑦-Bタイプ、⑫-Dタイプとなろう。③と⑦はタイプ別に見ると他の時期と較べてやや大きな規模を有す。また、中心ユニットとして第1ユニットが存在することは言うまでもない。ここでは明確に礫群と言えるものは存在しない。剥離技術も刃器状剥片の剥離を目的とした石刃技法に技術基盤を置くものである。

木苧峠第Ⅱ期 この時期は台地の東側よりに3個のユニットで構成されている。第24、25のユニットは剥片での接合関係が認められる。第21ユニットでは出土層位、使用石材との関係で接合関係にはないが同時存在と見做してよいであろう。各ユニットは㉑-Cタイプ、㉒-Aタイプ、㉓-Cタイプとに分類できよう。㉑、㉓は同タイプに含めたが出土量に差が認められる。むしろここでの中心ユニットは㉒であり、ナイフ形石器の出土も顕著である。このナイフ形石器の製作は第Ⅰ期と同様切断技法が存在するようであるが、やや小型化する傾向をもつ。

木苧峠第Ⅲ期 第2ユニットがこれにあたる。出土層位あるいは石材、器種などの点で本ユニットと共通性をもつユニットを見出すことはできない。発掘状況から考えても本ユニットは独立した1個で構成されていたものと考えられる。このためユニット自体を比較することは不可能となるが、一応ナイフ形石器の出土が3点と言うことでAタイプの様相を呈するものとして扱うことができよう。

木苧峠第Ⅳ期 この時期は再び第Ⅱ期に接近して位置する。ユニット数は、3個の存在が予想できるのであるが、いずれも接合関係は認められなかった。このため、第Ⅳ期においては積極的に3個のユニットの同時存在を肯定することはできないにしても、出土層位、石材等の共通性より1個のグループとして扱うことができるものと思われる。タイプ別すれば、㉔-Dタイプ、㉕-Dタイプ、㉖-Aタイプとなろう。㉖以外はかなり小規模となる。定形石器としては尖頭器の出土が著しい。きれいな両面加工品も存在するが、薄い剥片を素材とした周辺加工の尖頭器によく特色が現われている。これはナイフ形石器の変遷の中で把えられるものかもしれない。

木苧峠第Ⅴ期 この時期に属するユニット数は多く、6～7個によって構成される。ここでは第8ユニットを中心とした礫による接合関係で認定できよう。つまり、第9、11以外では礫片による接合が確認された。また、第9ユニットを本期に含めたことは、第6ユニットで検出された特殊彫器（木苧形彫器）と同器種の石器が存在することで、かなり接近した時期に構成されたものであろうことは疑いない。ただ、第11ユニットは小規模で希薄な分布しか示さず、ここに含める積極的根拠はない。次に、ユニットの分類では、④-Cタイプ、⑥-Aタイプ、⑧-Eタイプ、⑨-Aタイプ、⑪-Cタイプ、⑬-Cタイプ、⑭-Dタイプとすることができよう。しかし、④、⑪、⑬は遺物の出土量も少なく、Dタイプに近いものとなっている。また、

第8ユニットでは礫群の他に少なからず剥片の出土が認められる。反面、各ユニットとも量的には少ないが、礫の出土があることに注意したい。第9ユニットでは配石に近い形で礫の出土があったところから、Eタイプのユニットとしての性格も有していたものと思われる。特定石器としては木苧形彫器に注目したい。これには尖頭器と同様、片面加工品と両面加工品とが使用されている。

木苧峠第VI期 この時期では確実に3個以上のユニットで構成されている。各ユニット間は石器(彫器)による接合関係が認められた。各ユニットを分類すれば、⑤-Bタイプ、⑩-Aタイプ、⑮-Dタイプと見做すことができよう。また第5ユニットは礫の出土が多く、Eタイプの性格も兼ねたものと推察できる。石器の接合に関して報告では第5、15のユニットにおける接合が記されてはいるが、再整理の段階で第10ユニット内より出土した2点の石器片が接合した。つまり、この接合復原し得た彫器から推定できることは、最初に第10ユニット内で彫器として機能していたものが何かの要因(使用のための破損か)で再加工を余儀なくされ、同じ第10ユニット内で再加工が施された。次に、おそらく第5ユニット内での使用があったものと思われる。そこでの破損品の一方が第15ユニットに運ばれたものであろうか。他に、定形石器では尖頭器の出土が目立つ。細石核、細石刃と考えられる石器も出土しているところから、石器群に関しては一部に細石器文化の萌芽も窺える。

以上、木苧峠遺跡を例にとり接合関係を基本として、これをI~VI期にまで時期区分してみた。V期の場合を除きいずれも3個内外のユニットで一時期が構成されていることに注目したい。そして、この中には必ず特定石器を多く出土する大規模なAタイプのユニットが中核をなすような形で存在している。このAタイプのユニットこそまさしくそのグループの中で最も大きな比重を占めるものであろう。Bタイプとして分類できるものは存在しない場合もあり、この点明確な基準は設定できない。つまり、ある一定期間内に構成されるユニットはAタイプのものを中心にして、Bタイプ以下のユニットが付随して成立するものと考えられよう。そこで、この一時期に営まれた3個内外のユニットをもつ先土器時代人集団を1個の“単位”^{註13}として扱えることが許されるのではないだろうか。まさしくこの“単位”^{註13}をもって構成される遺跡こそがBase Camp

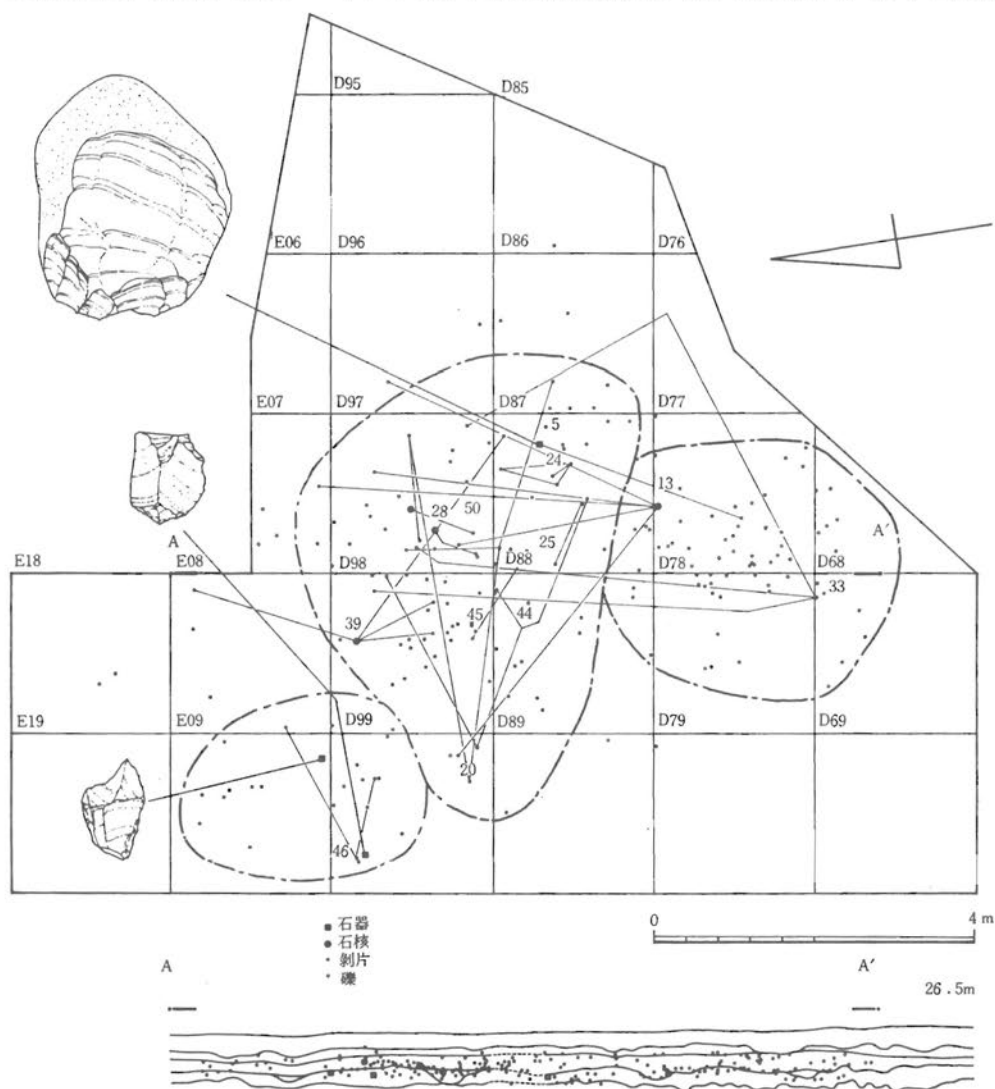


第5図 木苧峠遺跡VI期接合資料(彫器)

としての性格を備えていたものと考えられる。いま仮に、3個内外ユニットを1単位とすれば木苧峠第V期の集団は2個の“単位集団”^{註14}によって営まれていたものと考えられることができる。

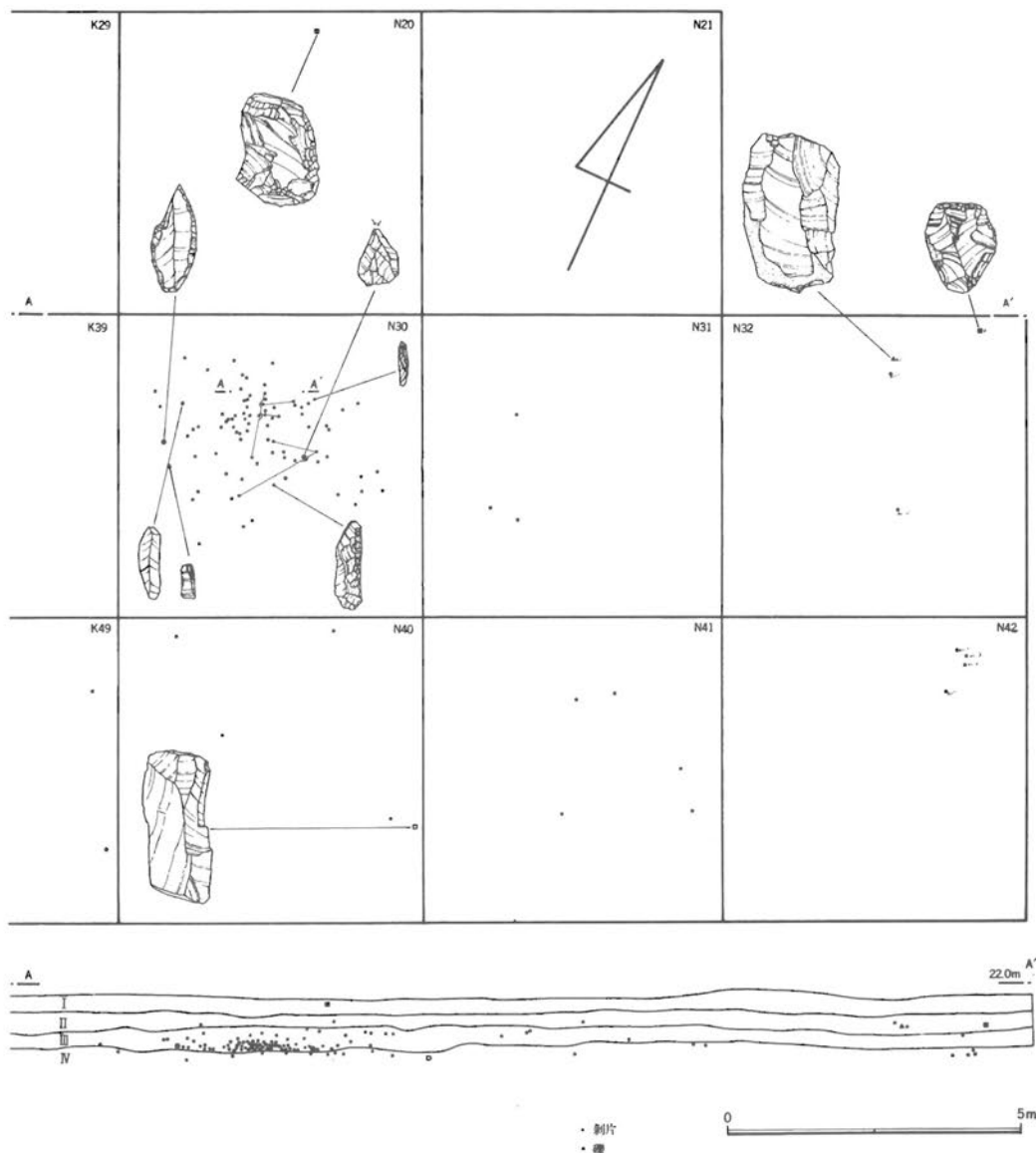
ここでの、2個のAタイプのユニットはその内容において若干の差は認められるにせよ特定石器と出土量の豊富さから見れば、他の時期と比較し、2倍以上の人間集団によって残されたものであろうことは容易に想像できる。他に注目すべき点としては礫群がある。木苧峠I、II期では明瞭な形で把えることはできないにしても、IV期以降でははっきりとした形で存在する。この礫群もBase Campを考えるうえではAタイプのユニット同様に欠くべからざる位置を有することになるようである。

また、木苧峠第III期としたものは前述した如くユニット数が1個で、発掘区から推定しても付近には同時期のユニットは存在しなかったと考えてよい。このように独立したユニットは他の遺跡でも見られる。第18ユニットの場合では石核と尖頭器が接合した例をもつが、これも単



第6図 向原北遺跡石器出土状況図

独で存在する可能性が強い。ここでの定形石器は、粗雑な作りの尖頭器 8 点と、スクレイパー、
 ナイフ形石器で構成されている。尖頭器の出土量から考えれば、この場所が石器製作を主目的
 として利用されていたことは明白であるし、大型の厚い剥片は尖頭器の素材としてあったもの
 と考えられる。このようなユニットは砂川遺跡でのナイフ形石器によって代表されよう。だが、
 第 3 ユニットの場合同様、第 18 ユニットでは近くに関連ユニットが存在しない。むろん A
 タイプのユニットとしての分類は可能となるが、石器製作の場としての傾向が強いため明確な



第 7 図 高根北遺跡石器出土状況図

位置づけは控えねばなるまい。

このような単独、あるいはそれに近いかたちで構成されるユニットは小田静夫氏の指摘されるように、集団の構成員が少なかったのか、短期間の居住でWork Camp^{註15}としての特殊性が残存したものと考えることが妥当であろう。むしろ、主たるBase Campは他の地点で営まれていたと考えて差しつかえあるまい。こうした単独ユニットの類例は木苺峠遺跡のみでなく、他の遺跡でもしばしば存在する。だが、この場合でも、石器群の集積の状態によりユニットとしては幾つかに分離できるものがある。向原北遺跡では約1,000m²の調査で1カ所だけに石器群の出土が見られた。これを細部にわたって検討すれば3個のユニットに分離できよう。その内の2個はBタイプとCタイプで、もう1個は礫を主体としたEタイプとすることも可能である(第6図)。これと類似する出土状況をもつ遺跡として、高根北遺跡の石器群(高根北II)をあげることができる(第7図)。ここでも詳しく観察すれば、BタイプとEタイプのユニットの存在が想定できる。出土した主要な石器は木苺形彫器であり、スポールの出土からこの種の石器を製作していたことは確実となり、Eタイプの礫群との関連に興味をもたれる。しかも、焼土、木炭等の出土は短い時間ではあってもBase Campが営まれていたことを想起させるものである。このように、単独で発見されるユニットはそれぞれに若干ではあるが内容に違いをもつようでもある。このため一概にその性格を規定することはできないにしても、少なからずBase Campとしての性格を備えていたものが多いものと思われる。

以上、木苺峠遺跡のユニット分布とその変遷について記してきたが、向原遺跡、地国穴台遺跡のユニットについても若干触れておきたい。これら両遺跡ではナイフ形石器、尖頭器を主体とする石器文化(向原I、地国穴台II)に含められるユニットが多い。石器の形態、組成から考えると木苺峠遺跡の第2ユニット(木苺峠第III期)との間に時期的な関連を認めることができるものと思われる。総体的に石器の出土地点、出土量が少なく、接合関係も認められていないため同時存在の確証を得ることはできない。だが、ユニット同志互いに接近して位置することから同時存在を思わせる類例もある。地国穴台遺跡における第2、3の各ユニット、第4、5あるいは第6、7とのユニット間の関係に興味をもたれる。しかも、ここでは石器、剥片等が多量の出土量を示すものは少ない。

ユニットを個別に見ると、向原遺跡では第7と9とがAタイプに、第3ユニットがEタイプとなるし、地国穴台遺跡では第6、7がAタイプ、第4、5とがEタイプで、他はB~Dの各タイプに分類できようが、木苺峠遺跡のようにはっきりとした形で先土器時代人の痕跡を抽出することはできないようである。このことはAタイプとして分類できるものが少ないことも一つの原因かもしれない。いずれにしても、遺跡自体がBase Campとしての性格がうすれていたのか、あるいはこの時期における単位集団のあり方の違いがユニットにあらわれているものと推察できるのであるが、具体的な把握はなし得ない。とくに、地国穴台Iに属する第6、7の各ユニットの場合、加工具としてのスクレイパーの出土が著しい。これは明らかにユニット

のもつ内容に相違を認めてもよいものである。むしろ、Work Campとしての性格が強いものと言えよう。このように各遺跡間でもユニットの分布と構成についての違いが認められることからさらに詳しい分析が必要となろう。その他にも先土器時代人の活動が窺われる遺跡も少なからず発見されだしてきた。だが、これらの至ってユニット数の少ない小規模な遺跡は個別的に独立して存在するものではなく、他にBase Campを有する大規模な遺跡の存在が充分に予測できる。ある一つの地域内において同一文化期に属する石器群をもつ遺跡を認定し、その文化内容を復原することは今後の大きな課題として残ろうが、その意味からも大規模な遺跡におけるユニットの欠除した時期を補うべく小さな遺跡にも充分に留意しなければなるまい。

さて、関東ローム層に覆われた下総台地での先土器時代遺跡は、石器以外の遺物の出土には期待できない。焼土、木炭片等も検出されてはいるが、文化内容の解明と、ユニットの相互関連を理解する有効な手段とはなり得ないようである。このような状況からすれば、石器や礫の接合関係がユニットの同時存在を証明する唯一の手掛りとなるものと思われる。少なくとも、現状では接合関係に代わるべき有効な手段はない。ただ単に石器や礫の接合が確認されたと言うだけで単純に同時存在が肯定されるとの考えも早計と思えなくもない。その証明には石器や礫の正確な位置づけが必要となることは言うまでもない。礫は破碎の要因がまだ明確に理解されていない現状では、ユニット間の礫による接合に疑問を残すものとなろう。だが、破碎された礫の場合でも「原位置」を保っていたものとして考えるとすれば、破碎は意図的にその行為がなされていたものと思われる。つまり、石器や礫片による接合関係でユニットの同時存在を把握できるとすれば、それには前提として原位置での行為を認めての結果として存在するものである。

他に、有効な手段として個別別資料の識別がある。砂川遺跡^{註16}ではかなり具体的な形で提示されるに至っている。筆者が実見した下総台地の遺跡でも明らかに同一母岩から剝離されたと考えられる石器に幾つか接したことがある。これは同じ石材の中にあっても特徴的な石質を有するものに限られ、黒曜石をはじめとしてその遺跡において主要な石材に関しては、接合資料を除き個別別資料の識別は困難なものが多いようにも思われた。ただ、明らかに同一母岩から剝離された石器や剝片の確認はユニットの関連を把握する場合には有力な手掛りとなろう。

このように、ユニットの同時存在を証明する作業には多くの障害を伴うことにもなるが、木苺峠遺跡では石器あるいは礫の接合をもって、先土器時代における人間集団の痕跡を時間的推移の中で単位集団として把えてきた。また、同時存在を予測できる各ユニットの中におけるAタイプの重要性はともかくとして、同時にそのAタイプ以下の石器群の構成は、当時の人々の様相をより端的に表現しているものと言えよう。ここでは、主にBase Campとして単位集団を把えてきたが、むしろまだ詳細な点については比較的資料も乏しいゆえ推定の域を免れないところもある。ただ、少なくとも木苺峠遺跡の場合、6期以上にわたっての人間集団の活動が認められたことは興味深い問題を提供したものと思われる。

以上、木苺峠遺跡を中心にユニットの分布と変遷について述べてきたつもりである。一応、下総台地におけるBase Campの基本的なあり方が、武蔵野台地での編年によるPhase II b以降ではAタイプのユニットを核として、3個内外のユニットをもって構成されることは前述した通りである。また、これを“単位集団”と呼称することは適切でないかもしれないが、ここではこのような形で理解しておきたい。

4 二・三の問題点

これまでは木苺峠遺跡を中心にして、石器群の分布と、そしてそれがいわゆるユニットとしての認識のもとで、一時期にどのようなタイプのユニットが存在していたのか、あるいはどれ程の規模で構成されていたものなのかという問題に重点を置いて論を進めてきた。このため、先土器時代の文化内容については触れるところが少なくなってしまった。そこで、二・三の問題点として本地域での調査に基づいたデータにより、石器群の内容、すなわち石器組成、定形石器の出土量などについて、他地域との比較、あるいは、技術的な面からの石器群の変遷等についても若干触れておきたい。

その一として、定形石器が集中して出土する場合を取り上げてみたい。ユニットの分類で言えばAタイプのものとなることはすでに前述した通りである。しかも、このAタイプのユニットは、特定石器が他を圧倒して優位を保ちながら存在することもあり、木苺峠遺跡をはじめ、他の遺跡でもかなり出土石器に特定石器の出土量によるかたよが見られる。その内容はたとえば、生産具としてのナイフ形石器、尖頭器によって占められることが多い。生産具はその性格からして消耗の度合いが著しく激しいものと思われるため、他の器種と較べてより多く製作されていたということは否定できまい。だが、それにもまして加工具としてのスクレイパー類の出土量は少ないように考えられる。エンドスクレイパーを多く出土した地国穴台Ⅰの石器組成は遺跡全体からしても、きわめて特殊な例と見ることができる。むろん、これには生活の場としての性格の違いはあったであろう。このように遺跡全体から窺えることは、生産具であるナイフ形石器、尖頭器が大部分を占めるため石器組成の把握にはむずかしいところもある。向原Ⅰでの定形石器はナイフ形石器と尖頭器に限られており、他の器種はまったく存在しない。これなども石器組成を考えるうえで充分注意しなければなるまい。

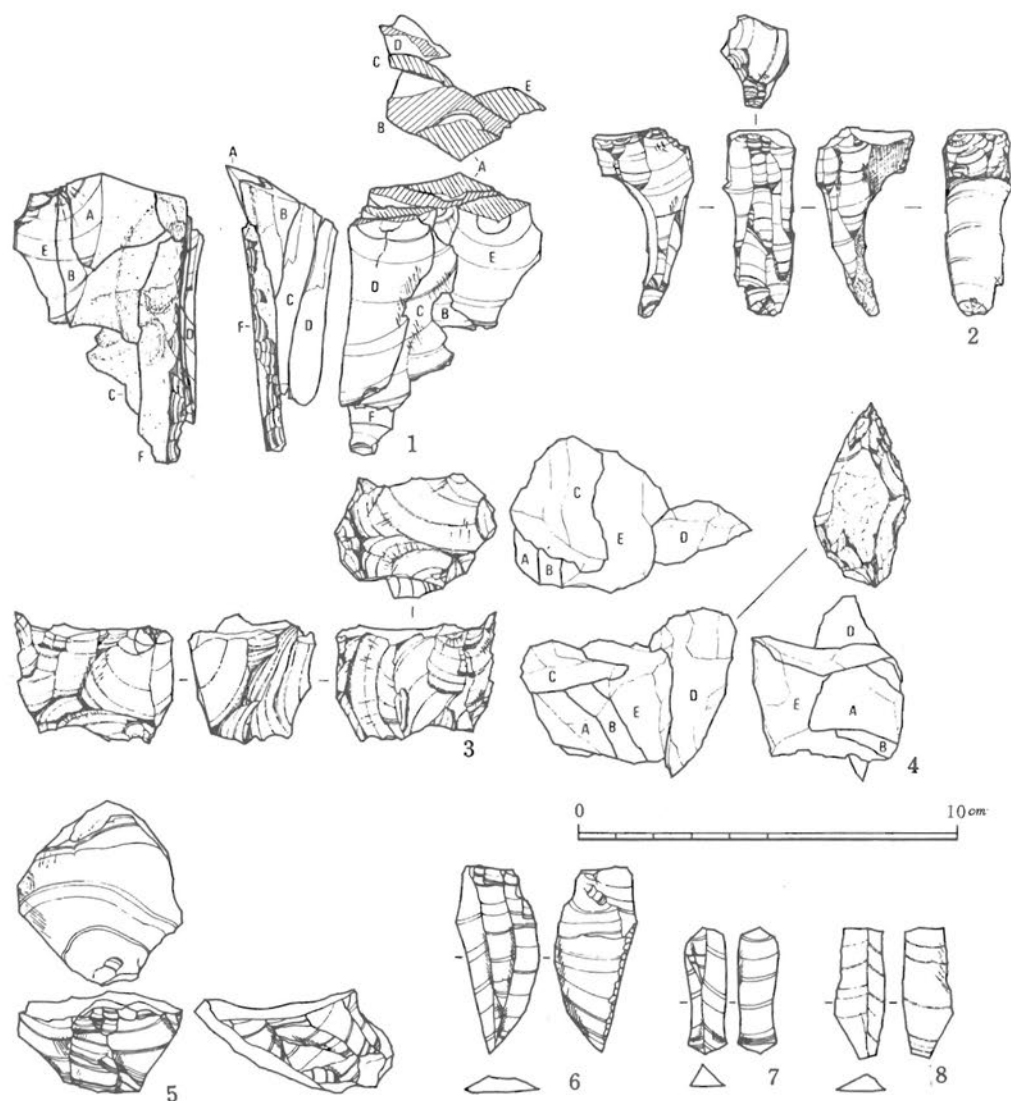
ある一つの遺跡で特定石器がより多く出土するようなことは、しばしば類例を見出すことができる。かって、このような遺跡が脚光を浴び、その文化内容をも表現するものとさえ考えられ、特定石器による文化期の設定がなされたこともあった。だが、遺跡内での特定石器のあり方を認識することにより、遺跡間の関連を有機的な結びつきをもつものとして考えた加藤晋平氏は、北海道常呂郡常呂川流域の調査から、「常呂パターン」として認識すべく仮説を提起した。これはエンドスクレイパーに依拠したものであるが、同一文化期内における石器組成を理

解するうえでの卓見であった。この点、本地域での貧弱な出土量しかもたない石器内容では、これを証明することはむずかしいであろう。そこで、貧弱な出土石器の中にあってもナイフ形石器や尖頭器は、少ないながらも石器組成として存在することが多いため、この二者によって遺跡相互の共通性が把握できるものとなれば、文化期の設定や石器群の内容も漸次解明されよう。しかも、ローム層の堆積が薄い下総台地では、層序による新旧関係を明確に分離できない石器群も、編年の一端を担うことも可能となるものと考えられる。

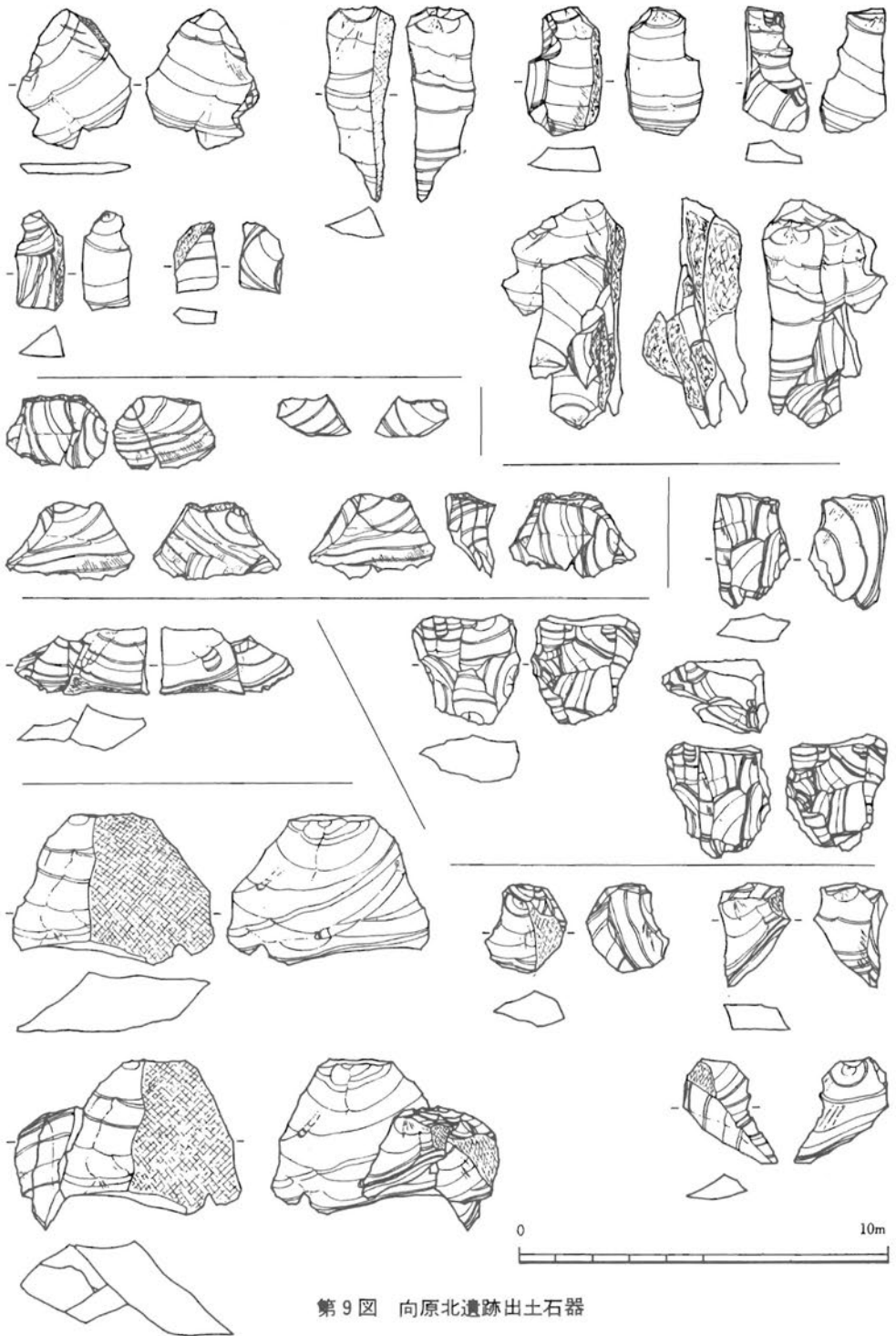
次に、技術的な面から石器群の変遷を見ると、下総台地における第4層出土の石器群はかなり良好な縦長剥片を意識した剥離技術を有するものである。いわゆる石刃技法に類するものと考えられる。もっとも典型的な石器群としては、木苧峠Ⅰ（木苧峠Ⅰ期）石器文化の中に見出されよう。ここでの接合資料からは、容易に刃器状剥片の剥離を目的としたことが窺われる。他に、高根北Ⅰ石器文化とした石器群や、市原市菊間遺跡で出土した石核と剥片から石刃技法に近い剥片剥離技術を看取することができる。また、これらの石器群は現在までに発見されている中でも、比較的古い時期に属する石器群であり、以後、時代が下降するに従って次第に剥離技術はその伝統を失い、剥片そのものに規格性が存在しなくなるようである。それは第3層中より出土する諸石器群によって証明されよう。第3層出土の石器群には、ほとんど刃器状剥片としての注目すべき資料はない。それに類似する剥片は僅少なから出土する遺跡もあり、北ノ台遺跡にも見られる。しかし、まとまった資料といえるべきものではない。この点、木苧峠Ⅱ石器文化とした第18ユニットより出土した石核と剥片の接合資料によれば、石刃技法の消滅とは言えないまでも、刃器状剥片の剥離に固執する意識は薄れてきているようである。また、石核や剥片の接合資料も多く出土した向原北遺跡に限っては、報告でも触れておいたが剥片剥離作業には剥片剥離という行動だけが強く存在しつつも、目的とした剥片は認められないようである。むろん、原石の供給ともおおいに関係することではあろうが、地理的問題はさておいて、この剥片剥離技術の存続は、単に本地域だけの問題にとどまらず、少なくとも関東全域にわたることになろう。そして、この石刃技法の崩壊も注意にのぼっている。

ところで、本地域における石刃技法に立脚した石器群としては、木苧峠Ⅰ期のものがあり、ここでのナイフ形石器は切断技法の採用という点からも砂川遺跡出土のナイフ形石器に近似するようである。次の段階の石器群としては木苧峠Ⅱ期、高根北Ⅰの各石器群が考えられようが、木苧峠Ⅱ期では小形化したナイフ形石器となり、高根北の場合では、形態的に見ればナイフ状ポイント、あるいは石刃尖頭器と呼称することもできるかもしれない。いずれにしても、少ない資料ではあるが、ナイフ形石器そのものの機能分化が窺われるところに注意したい。さらに、この時期には、ナイフ形石器でも切出形を呈したものは発見されていないものの、他の地域註21での石器群の様相からすれば存在してはいたことであろう。ただ、この切出形石器については、研究者間において必ずしも一致した認識の中に理解されているものではない。木苧峠Ⅰ期以前から存在していたであろうこの切出形石器は、本地域において、それに類似する石器は第3

層中から多く発見されている。遺跡名としては丸山遺跡、今島田遺跡、木苅峠遺跡、地国穴台遺跡、向原遺跡、向原北遺跡、石道谷津遺跡などをあげることができよう。以上の諸遺跡での出土層位は第4層に及ぶものはない。つまり、石刃技法の盛行以後に、切出形石器は普及したものと考えてもよさそうである。これはナイフ形石器の機能分化という現象の中で、石器の小形化が促進され、切出形に近い形態を備えたものが定着化した時期とすることも可能かもしれない。しかも、この他にも種々な形態を有するナイフ形石器も存在するゆえ、それのもつ機能分化と小形化はこの時期に一つのピークに達したものと言えるのではないだろうか。また、こ



第8図 木苅峠遺跡出土石器(1~4), 菊間遺跡出土石器(5~8)



第9図 向原北遺跡出土石器

の段階の石器群の中には、尖頭器が歴然とした形で石器組成の一員としてその領域を有するようになる。いわば、主要石器の交替期とも見做される複雑な様相を呈した時期でもある。

要するに、下総台地より出土した資料から考えれば、砂川遺跡等で注意された石刃技法の技術基盤は、ナイフ形石器が幾つもの形態に機能分化する中で、ナイフ形石器自体の小形化という過程を経ることとなる。そこで、縦長剥片の剥取という技術のもつ意味が失われ、その中で石刃技法そのものにも影響を与え、次第に刃器状剥片の剥離という意識を消失させていくのではないだろうか。しかも、尖頭器の普及は、また石刃技法を発展させるものではなく、木苧峠第18ユニットの尖頭器などを見れば、むしろ技法そのものを必要としなくなっている面も窺われる。

5 おわりに

これまでに下総台地内で調査の行なわれた先土器時代の代表的な遺跡について、石器群の分布をいわゆるユニットという認識のもとに、その同時存在性を中心として述べてきたつもりである。だが、対比することのできる遺跡には限りがあり、遺跡のもつ構造については、十分に理解し得たとは思われない。それを補足すべく若干の問題点を提起したが、これも限定された地域内にとどまったかたちでしか比較検討をなし得ず、推論の域を脱せず不本意なものとなってしまった。この点、後の機会に再び論じてみたいと思っている。

それはさておき、本地域での先土器時代の遺跡を見ると、各遺跡によっても、ユニットの構成についての差異を認めることができる。そこで、もっとも正確に先土器時代遺跡の構造を理解するためには、その遺跡の規模を把握することに重要な意味があるものと思われる。とりわけ、下総台地における先土器時代の研究は始まったばかりでもあり、これを機に、さらに研究の進展が期待される地域でもある。昨今の千葉県下における先土器時代遺跡の発見には目覚ましいものがあり、包含地の調査のたびごとに石器群が確認されていると言っても過言ではない。すでに、ローム層内の調査は一般化しつつあり、よほどの悪条件にない限り必要なものとなった。遺跡の調査はこのような認識のもとに今後も進められるべきであり、これをせめて緊急調査の中に定着化させていかねばなるまい。そこに、はじめて研究に必要な資料の提示ができるようになるものと考えられる。

最後に執筆にあたり、加藤晋平、西野 元の両先生をはじめ、東京都の小田静夫氏、明治大学の安藤政雄氏、同僚である天野 努、高木博彦の両氏には種々の御指導をいただいた。文末ながら記して感謝する次第である。

註1 ユニットという表現の他に同じ意味をもつ2、3の言葉が使われてはいるが、ここでは以下、ユニットという語を使用する。

註2 代表的遺跡での各石器群については鈴木道之助氏の論文を参照されたい。ここでは重複をさけるため石器実測図は省略した。

註3 三里塚No55遺跡「三里塚」や、石神第1地点遺跡「臼井南」の石器群がある。

註4 尖頭器は単独で発見されることが多く、まとまった資料は少ないが、南大溜袋遺跡の資料は時期的には近いものであろう。

註5 高根北遺跡は概要を省略したが、ここでも3個のユニットが検出され、ハードローム層出土の石器群(高根北I)とソフトローム層出土の石器群(高根北II)とに分離できる。

註6 切出形石器は古い時期から存在するようであるが、木苧峠遺跡ではソフトローム下部より出土し、尖頭器はそれよりも若干上部からまとまって出土しているため、木苧峠遺跡に限っては切出形石器のほうが古いようである。

註7 このタイプの彫器は南では長野県「男女倉遺跡」でも多量の出土が認められている。

註8 加藤晋平「北海道の石刃石器群について」 日本考古学協会昭和50年度大会研究発表要旨 日本考古学協会 1975

註9 ユニットとブロックという名称はその内容に若干の差があるようである。「遺物の集中して分布する状態を「ブロック」と呼んできた。……こうしたブロックの有機的なまとまりをわれわれは「ユニット」と呼んでいる」(相模野考古学研究会 1972)

註10 加藤晋平、桑原 護 『中本遺跡』 1969

註11 加藤晋平、戸沢充則 「小林、小田、羽島、鈴木論文に対する論評」 『第四紀研究』 10-4 1971

註12 木苧峠遺跡の石器群を6期に分けたことは、ユニットの同時存在を重視したためであり、石器組成、器種、石材等の関係でそれぞれが時間差によるものと考えた。もちろんこの中には同一文化期に含められるものも存在すると思われる。

註13 ここで言う「単位」は註9で触れた「ユニット」と類似するようにも考えられる。

註14 「単位集団」なる語は原始共同体社会の単位(近藤 1959)として使用されることが多い。だが、ここでは先土器時代に限ったものであり、一応、原始共同体社会の集落構成とは区別して考えたい。

註15 小田静夫 「千葉県における先土器文化(2)」 史館第5号 1975

註16 砂川遺跡でも各3個のブロックが接近して位置し、接合関係も多く見られる。このような遺物の分布は木苧峠遺跡とも共通するユニット構成として扱えられるのではないだろうか。

註17 芹沢長介 「旧石器時代の諸問題」 『日本歴史』 1 岩波講座 1962

註18 註10と同じ

註19 加藤晋平、畑 宏明、鶴丸俊明 「エンド・スクレイパーについて」 考古学雑誌55-3 1969

註20 鎌田俊昭 「関東・東北地方における先土器時代中期石器文化の地域性と共通性 (1)」
物質文化 25 1975

註21 安蒜政雄 「関東地方における切出形石器を伴う石器文化の様相」 駿台史学 32
1973

註22 小田静夫 「台形石器について」 物質文化 18 1971

参考文献

1. 天野 努 「地国穴台遺跡」 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書』 II 1974
2. 安蒜政雄 「殿台遺跡」 市川市教育委員会 1970
3. 大井晴男 「日本の石刃石器群“ Blade Industry”について」 物質文化 5 1965
4. 大沼忠春他 「法蓮寺山遺跡」 『小金線』 1973
5. 小野 昭 「ナイフ形石器の地域性とその評価」 考古学研究16-2 1969
6. 小田静夫 「石神第 I 地点」 『白井南』 佐倉市教育委員会 1975
7. 小田静夫、C. T. キーリー 「武蔵野公園遺跡」 野川遺跡調査会 1973
8. 小田静夫他 「仙川遺跡」 東京都教育委員会 1974
9. 小田静夫 「千葉県における先土器文化 (1)」 史館第 4 号 1975
10. 小林達雄、小田静夫他 「野川先土器時代遺跡の研究」 第四紀研究10-4 1971
11. 加藤晋平 「先土器時代の歴史性と地域性」 『郷土史研究と考古学』 郷土史研究講座 1 1970
12. 近藤義郎 「共同体と単位集団」 考古学研究 6-1 1959
13. 斉木 勝他 「市原市菊間遺跡」 1974
14. 相模野考古学研究会 「小園前畑遺跡発掘調査報告書」 神奈川県綾瀬町教育委員会 1972
15. 相模野考古学研究会 「地藏坂遺跡発掘調査報告書」 神奈川県綾瀬町教育委員会 1974
16. 杉原荘介 「市川市史」 第 1 巻 市川市史編纂委員会 1971
17. 杉原荘介、大塚初重 「常総台地における関東ローム層中の石器文化」 駿台史学 5 1955
18. 杉山晋作 「No52遺跡」 『三里塚』 1971
19. 鈴木道之助 「木苧峠遺跡」 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書』 III 1975
20. 鈴木道之助、西山太郎 「雨古瀬遺跡」 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書』 IV 1976
21. 高木博彦 「向原遺跡」 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書』 II 1974
22. 高木博彦、西山太郎 「石道谷津遺跡」 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書』 III 1975
23. 月見野遺跡群調査団 「概報 月見野遺跡群」 明治大学考古学研究室 1969
24. 戸田哲也 「千葉県南大溜袋遺跡の調査」 考古学ジャーナル78 1973
25. 古内 茂 「No55遺跡」 『三里塚』 1971
26. 古内 茂、矢戸三男 「柏市鴻ノ巣遺跡」 1974
27. 古内 茂 「船尾白幡遺跡」 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書』 V 1976

28. 古内 茂 「向原北遺跡」 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書』Ⅴ 1976
29. 中山吉秀、古内 茂 「高根北遺跡」 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書』Ⅳ 1976
30. 中山吉秀、古内 茂 「北ノ台遺跡」 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書』Ⅲ 1975
31. 森島 稔他 『男女倉』 和田村教育委員会 1975